

2009 - 51

活動名称	自立と尊厳を保ち、安心して住み続けることのできる地域へ ～ホスピスケアの理念を共有した「ケアタウン小平」の取り組み～
活動要旨	複数の事業者が同じ建物の中にある利点を活かし、地域住民の協力を得ながら、さまざまな困難に直面している人々を支援している。医療、福祉、教育等の事業を通して、安心して住み続ける地域づくりを目指している。
応募者	NPO法人コミュニティケアリンク東京 事務局長 中川 稔進
連絡先	〒187-0012 東京都小平市御幸町 131-5

1. 概要

特定非営利活動法人コミュニティケアリンク東京は、東京都心から 26km 離れたベットタウン、小平市にある“ケアタウン小平”という場所で、広く一般市民を対象とし、がんなどの終末期にある方や高齢者の方など地域社会でさまざまな困難に直面している人々を支援し、医療、福祉、教育等の事業を通して、安心して住み続けることのできる地域社会づくりに寄与することを目的としています。当法人は、上記の目的のため、以下の9つの事業を行い、現在デイサービス事業、訪問看護事業を中心として、(4)を除く、8つの事業を実施しています。

(1) デイサービス事業	(5) 豊かな庭づくり事業
(2) 訪問看護事業	(6) 文化・スポーツ倶楽部事業
(3) 食事サービス事業	(7) 子育て支援事業
(4) 緩和ケアに関する心理相談事業	(8) 地域のボランティア育成事業
(9) 医療や福祉に関する各種セミナー及び講演会、地域交流などの企画、運営事業	

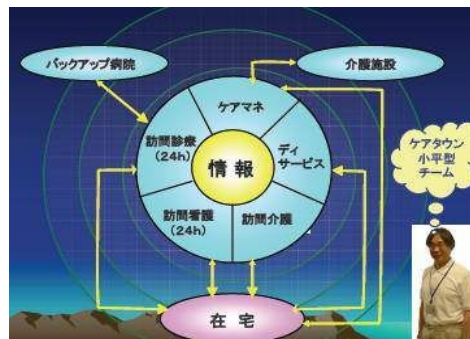
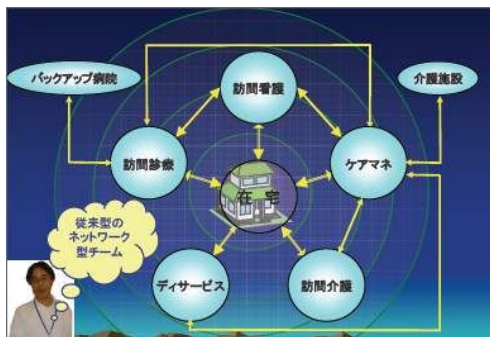
まず、ケアタウン小平の事業についてですが、ケアタウン小平は3階建ての建物で、そこに4つの事業体があります。(有)暁記念交流基金(ケアタウン小平の開設、土地と建物の管理運用、賃貸アパート「いつぶく荘」(2,3階)を運営)、1階部分にはテナントとして、ケアタウン小平クリニック(在宅療養支援診療所)、NPO 法人コミュニティケアリンク東京(ケアタウン小平訪問看護ステーション、デイサービスセンターなど)、(株)クロスケア(ケアタウン小平ヘルパーステーション)、以上4つです。

の暁記念交流基金がケアタウン小平の開設者で大家さんです。そして賃貸アパート「いつぶく荘」に住む入居者や ~ の事業体は、いわゆる店子です。月々の家賃を支払い、ケアタウン小平を拠点にして事業を営みます。いつぶく荘の入居者は必要に応じて医療や介護のサポートを受けながら自分なりの生活を営みます。医療や福祉だけでなく何かしらのケアを必要とする人や、ケアを提供する専門家や地域のボランティアが相互につながりあう「場」の総称として「ケアタウン小平」と言います。ここで中核として活動しているのが、私たちのNPO 法人コミュニティケアリンク東京です。

ホスピスでのケアの経験をもとに、私たちはたとえがんの末期の患者さんであっても、重い病気を抱えておられる方でも、認知症の方でも最期まで地域の中で、尊厳と自立をもって暮らすことができるコミュニティづくりを目指し、それを支える理念を「コミュニティケア」と呼び、地域での医療と介護さらに、暮らし方の新しいモデルづくりを実践しています。

在宅ケアにおける従来型のネットワーク(次頁図左)では、複数の事業者が、一人の利用者を訪問したとしてもそれぞれの拠点に戻っていくため、電話やFAXでの情報のやりとりが多くなり、細やかな情報の共有がスムーズではありません。したがって日常的にきめ細やかなチームケアを必要とするホスピスケアを提供することが困難なこともあります。

しかし「ケアタウン型チーム」(下図右)は、各事業所の拠点が同じ建物にあるので、この課題を解決できると考えています。各事業者が異なる時間に一人の利用者を訪問しても、同じ場所に戻ってくるので、速やかに情報を共有し、質の高いチームケアを提供することができます。つまり、私たちのチームはホスピスケアの理念を共有しながら動くことができるのです。



ケアタウン小平の活動が始まって4年になります。4年間で私たちが在宅ケアを提供した患者さんのうち約300名が亡くなっていますが、そのうち約70%の214名が在宅で最期まで過ごすことができました(214名中、ガンの方174名、非ガン40名)。きめ細やかなホスピスケアが提供されたことによって可能となった数値といえるでしょう。また地域には在宅療養を望む方が潜在的に多いことも改めて実感しています。

私たちの活動には、地域のボランティアの協力が欠かせません。専門家だけで提供するケアには制度の限界や、職種が持つ能力の限界があります。限界から生まれるケアの隙間を、地域のボランティアさんと協働することで埋めることができるのです。

子育て支援事業では、大人と子どもが定期的集う遊びの会などを開いています。それらを通じて、日常的に子どもの声が響き、ケアタウン小平は地域の一部となりました。子どもたちがケアタウン小平で小さい時から互いに支え合うことの大切さを学び、次世代へコミュニティケアを再生産することができれば幸いですと私たちは考えています。

2008年には、遺族会「ケアの木」が設立されました。悲嘆を抱えながら生活するご遺族も少なくありません。そのような方々をスタッフだけではケアしきれないこともあります。「大切な人を亡くす」という共通の体験を持つ遺族会の方々と協働して、遺族ケアを行っていきたくと考えます。

自分の存在の不確かさや心や体の痛みや苦悩は、なにも病気の人だけが抱えているものではありません。健康な人もそうでない人も、お互いに支え合うことが必要です。広く地域住民に呼びかけて、当法人の事業に参加してもらうことによって、互いに支え合い、コミュニティケアを実現していきたくと考えます。



2. 地域の紹介

ケアタウン小平のある小平市は、東京都の多摩地域の武蔵野台地上にあり、都心からは26キロのところです。このあたりは水が乏しく、人が生活するには適さない場所でしたが、羽村から江戸まで、多摩川の水を運んだ玉川上水の開通（承応3年、1654年）がきっかけで開拓の条件が整いました。玉川上水から用水を引き、生活用水とすることで、江戸の近郊農村として開発が進みました。青梅街道などの主要な街道を中心に、整然と計画された短冊型の地割の様子は、今なおうかがうことができます。

明治22年（1889年）に7つの村が合併して、神奈川県北多摩郡小平村になりました（多摩地域は明治26年に東京府に編入）。昭和の初めには、学園地域の宅地分譲が進み、軍の施設が造られるなかで次第に人口も増え、昭和19年（1944年）に小平町となりました。

戦後になると、都心部のベッドタウンとして、また工場の進出もあって、人口が急激に増加し、昭和37年（1962年）に市制を施行しました。なお「小平」の名前は、初めて開拓されたところが「小」川村であり、また地形が「平」坦だったところから、名付けられたということです。

近年は、市民文化会館（ルネこだいら）がオープンするなど、地域文化の育つ環境が整いつつあります。また、玉川上水・野火止用水など、過去から受け継がれてきた豊かな自然環境を生かしながら、新しいまちづくりが始まろうとしています。

ケアタウン小平で活動する各事業者は所在地である小平市、近隣の小金井市などが主な活動範囲となり、ケアタウン小平を中心にデイサービスセンターの送迎範囲は半径2km、訪問看護ステーションの訪問範囲は3km、クリニックの訪問範囲は4～5kmとしています。ヘルパーステーションは、距離数ではなく小平市を中心に訪問し、小金井市、西東京市の一部にも訪問し、在宅療養をされている方へサービスを提供しています。

ご参考 小平市 年齢別老年人口 / 平成19年度統計資料（各年1月1日）

年次	総人口 (A)	65歳以上 (B)	高齢化率 (B)/(A) ×100	年齢別老年人口			
				65～69歳	70～74歳	75～79歳	80歳以上
平成11年	174,057	23,529	13.5%	8,834	6,472	3,860	4,363
12年	175,113	24,698	14.1%	9,038	6,889	4,227	4,544
13年	176,082	26,053	14.8%	9,508	7,182	4,576	4,787
14年	177,803	27,383	15.4%	9,761	7,583	4,969	5,070
15年	179,225	28,625	16.0%	10,027	7,854	5,327	5,417
16年	179,846	29,541	16.4%	9,882	8,244	5,718	5,697
17年	180,345	30,637	17.0%	9,915	8,384	6,108	6,230
18年	180,876	31,871	17.6%	9,882	8,873	6,427	6,689
19年	181,560	33,158	18.3%	10,027	9,164	6,794	7,173
20年	182,751	34,320	18.8%	10,090	9,453	7,072	7,705

（注）外国人登録人口を含む。資料：住民基本台帳人口・外国人登録人口（高齢者福祉課）

【上記は小平市ホームページより抜粋】

3. 活動の内容

立ち上げまで

ケアという関係で結ばれたコミュニティ“ケアタウン小平”は2005年10月に誕生しました。アパートと同じ建物の中に、診療所や訪問看護ステーション、デイサービスセンター、ヘルプーステーションなどが入って連携しあうことで、「住み慣れた家で最後まで暮らし続けたい」という入居者や地域の人たちの願いをかなえたいという思いで、立ち上げに至りました。

当法人理事長の山崎は、ケアタウン小平から歩いて15分ほどのところにある桜町病院聖ヨハネホスピス（小金井市）で、14年間ホスピスケアに医師として取り組んできました。患者さんの苦悩に耳を傾け、大切な人を亡くそうとしているご家族の思いに寄り添い、看護スタッフやボランティアも含めた多職種によるチームケアに取り組んできました。

特に、ボランティアの皆さんとの協働体験は、問題意識とその解決のための理念が共有できれば、日本でも専門家とボランティアとの継続した協働が可能であることを確信させてくれるものでした。このことはホスピスケアにおいて学んだ最大の収穫の一つといっても過言ではありません。

また、さまざまな職種の専門家やボランティアがチームを組み、自力だけでは自立（自律）することや自分の尊厳を守ることが難しくなってしまった人々の自立（自律）を支え、尊厳を守り、共に生きる、というチームケアの大切さも学びました。それらのケアの過程で多くの方が身体の自立は無理でも心の自立である自律を維持したり回復されました。そうした人は、その後の生の長短によらずに、人間としての尊厳を確認し、厳しい状況の中でも、生きる意味を見出すようになりました。そのようなことを通じて、生きる意味を見出しかねて苦悩する人へのケア、「スピリチュアルケア」の大切さを実感しました。

そして、こうしたことは末期のガン患者さんに特有なことではないということに気づき、現在の主に末期のガン患者にしかケアを提供できないホスピス、また制度上、病院施設としてのホスピスは病棟であって、患者さんや家族の生活を家にいるのと同じようには支援できないということの限界を感じ、山崎は1年間の休職期間を得ました。当時、日本一の福祉自治体として知られた秋田県鷹巣町（現・北秋田市）において福祉施設を訪れたのですが、認知症の高齢者が自立と尊厳を徹底的に守られ、生き生きと暮らしている姿と、その一方でその利用者が末期がんになった場合は一般の病院に入院となるという状況をみて、“福祉とホスピスの融合”というアイデアを得ました。また、デンマークでは、日本に比べたら高い税金ではあるが、自分の身近な地域の中で認知症でも重度の障害を持っていても自律と尊厳が確かに守られているのを垣間見ました。

こうして、ケアの対象をがんの患者さん以外にも広げた、「より普遍化されたホスピスケア」と「在宅ケア」をキーワードとした、「ホスピスケアからコミュニティケアへ」とアイデアがまとまってきました。“ケアタウン小平”構想の始まりです。

ケアタウン小平で目指そうとしたことは、やがて一人暮らしを余儀なくされる高齢者が、病や障害を持っていたとしても、地域の中の自宅で暮らし続けられるモデルを作りたいということでした。そのために在宅ケアを希望している高齢の方や一人暮らしの方が自宅として住める空間の確保、そしてその家に住み続ける機能の確保をめざし、これを“ケアタウン小平”の基本概念としました。一方同じ時期、ホスピスケアの同志でもある友人の長谷方人氏も同様の構想を得て山崎医師に一枚のメモを渡していました。長谷氏は有限会社 暁記念交流基金を立ち上げ、コミュニティ形成の拠点となる土地と建物を準備することになったのです。

こうして、ケアタウン小平は誕生しました。

ケアタウン小平の構成とその活動

ケアタウン小平は中庭の人工芝が美しい3階建ての建物です。1階のテナント部分には、当 NPO 法人が運営する訪問看護ステーション、デイサービスセンターのほかに、別事業体である 24 時間対応の在宅療養支援診療所「ケアタウン小平クリニック」や、株式会社クロスケアが運営するヘルパーステーション、居宅介護支援事業所があります。

2階、3階にはこの建物全体の管理・運営を行う有限会社 暁記念交流基金が運営する 21 戸のアパート「いつぶく荘」があります。NPO 法人をはじめとした一階の事業者は、暁記念交流基金と建物の賃貸借契約を結んで活動する独立した事業者ですが、同じフロアで隣り合っているため、医療、看護、介護の連携をスムーズに行うことができます。



左奥からクリニック、訪問看護ステーション、居宅介護支援事業所・ヘルパーステーションが並んでいます。一階奥はデイサービスです。
中はドアやパーテーションなどで仕切られていますが、気軽に行き来をしたり、意見交換がされています。

緑の芝生がきれいな中庭。犬の散歩をしている方や、午後になると子どもたちも集まってきます。サッカーボールが飛んできて来ても大丈夫なように建物のまわりにはカーテンネットも用意しています。子どもたちは元気な挨拶をして、準備！でも時々、元に戻すのを忘れちゃいます。後片付けもしっかり忘れないよう、親御さんとも話して、ルールづくりもしています。



NPO法人コミュニティケアリンク東京の事業

ケアタウン小平訪問看護ステーションでは、ホスピスでの終末期医療に従事してきた看護師がおり、現在常勤6名、パート1名の合計7名のスタッフが訪問看護を提供しています。がん末期の方に限らず、慢性疾患の方や神経難病の方、認知症の方へも24時間体制でケアを提供しています。在宅では医師よりも訪問する回数の多い看護師の役割が大切になります。なぜなら、在宅で利用者を支える家族へのサポートも重要な位置づけを持つからです。ちょっとした発言や表情の変化などをキャッチしケアへつなげる看護師の役割はとても大きいのです。

デイサービスでは常勤・非常勤を含む14名のスタッフが介護サービスを提供しています。ここの特徴は重症度、要介護度の高い方の利用が多いということです。毎月延べ280~300名の方が利用されますが、そのうち5割以上が要介護度4、要介護度5の方です。そのため、常勤スタッフとして看護師3名、介護福祉士1名を人員配置しています。

まず在宅であっても病状や容態の重い方はいらっしゃいます。そしてそういった方たちを家族は24時間介護しているのです。一般的なデイサービスは、比較的軽度の方たちを対象に運営しているため、行き場のない状態が生まれます。デイサービスは家族の介護休養の側面が役割として大きいのです。でも重症な家族を抱える方たちを支援する受け皿がない。そのため、私たちはこのようなデイサービスを開設しました。当法人が運営するデイサービスはいわゆる一般型のデイサービスですが、認知症の方でも来所が可能な方に対しては、ほかの病気の方々と同様に対応をしています。



また、当法人では「食事サービス事業」として、いつぶく荘入居者やデイサービスなどへの食事サービスを行っています。また「豊かな庭づくり事業」として、地域住民を対象にケアタウン小平に落ちる落葉を腐葉土にして販売を行い、また腐葉土を利用した園芸でのプランター作りやハンギングバスケット教室などを企画運営しています。「文化・スポーツ倶楽部事業」として毎週2回のアロマセラピーサロンなどを行っています。デイサービスでもアロマサリピートリートメントを実施しています。そのほか、社会の中で活躍する有識者・著名人を招いて「いのちを語る」をテーマに、毎年講演会を近隣病院との共催で開催しています。

ケアタウン小平での取り組みについて地域の関心をもってくれる人を増やしていくことも大切なことです。例えば、子育て支援事業では、大人と子どもが毎月1回集い、遊びの会を開いています。時にはいつぶく荘のお年寄りも参加します。この遊びの会は近隣の武蔵野市に拠点を置くNPO法人で、広く子どもから大人に対して「豊かなあそび環境」をつくる活動をしている「あそび環境 Museum アフタフ・バーバン」の協力を得て行っています。これをきっかけに、日常的に子どもの声が響くこととなり、ケアタウン小平は地域の一部となりました。この頃は、学校の帰りにふらっと立ち寄ったり、友達と待ち合わせて中庭で遊んだりするごく自然な姿がみられるようになりました。デイサービスなどに遊びに来る際にはスタッフや利用者とも知りあうなど、互いに支えあうことの大切さを学びます。次世代へコミュニティケアが繋げることができていると考えています。

ケアタウン小平は地域の心地よい居場所となりつつあります。お年寄りは老人施設、病人は病院、子どもは学校、とそれぞれの施設に閉じこめられるのではなくつながりあう必要を今、まさに感じています。

夏休みに行った子どもたちによるキッズボランティアを行ったときのことです。子どもたちはボランティアとは何かという話を聞いた後、自分たちにどんなお手伝いができるかを、自分なりに考えたり、デイサービスやいつぶく荘で食事の提供の手伝いなどを経験しました。お年寄りからの「ありがとう」の言葉が子どもたちを勇気づけ、地域で自分が必要とされていることを感じたようです。

ケアタウン小平では子どもたちに中庭を開放しています。サッカーボールを蹴ってあそんでいた子どもたちが、建物のガラスを割ってしまったことがありました。また子どもたちのかくれんぼで、いつぶく荘のある2階や3階まで駆け上がってきたのには、さすがに何軒かから苦情がでたことがありましたが、ケアタウン小平から当法人が小学校の朝礼に出かけていたり、お願いのチラシを配布したりしてケアタウン小平の様子を説明し、ご理解いただきました。こちらからの一方的なお願いではなく、地域の方々とお互いに理解しながらルールづくりが進んでいます。

こうした事業を支えてくれているのがボランティアの存在です。ケアが必要な人に、必要なだけのケアを提供したいと考えたら、専門職だけ、制度によるサービスだけでは不十分です。当法人ではボランティア講座を実施し、講座修了後、現在80名の方が登録され、うち約60名の方が活躍しています。デイサービスセンターでは利用者の送迎、入浴介助、一緒にレクリエーションなど、いつぶく荘では食堂や居室での入居者との関わり、生活の中のちょっとしたお手伝いなど、子育て支援事業では、読み聞かせや絵本の貸出しをする子ども文庫やキッズボランティア講座(年1回)月に1回開催している「集まれ!子ども広場」などでボランティアが活躍しています。

ボランティアには毎週1回、曜日を固定して、4時間協力いただくのが基本となっています。これは利用者などが混乱なく過ごせるよう、日々の生活をなじみの関係において対

応させていただくためです。その意味でもボランティアの協力は重要な位置をしめており、各活動の中において貴重なアドバイスをいただいています。スタッフ以外の市民が入り、さまざまな意見がでることによって、専門職であるスタッフの中にも戸惑いがでることもあります。しかし、本当のケアとは何なのか、スタッフ、ボランティアと一緒に考えることによってケアの理解を深め、よりよいケアを実現しようと努力しています。利用する人が一日を楽しくすごせて、生きていてよかったと感じること、これが大事なことです。スタッフ、ボランティアがチーム一丸となって、良いケアを提供することを目指して一歩一歩進んでいます。

ケアタウン小平では2年目の秋から、「ケアタウン小平応援フェスタ」という集いを開催しています。各事業の利用者やそのご家族、そして地域住民との交流を目的としたものです。ケアタウン小平の存在が地域の方々を支える。そして同時に地域の皆さんにケアタウン小平を応援していただく。お互いに支え合うことの思いを共有するための催しです。

毎年100名近いボランティアが会を支え、400名近くの人々が集います。文化スポーツ事業ではハンドマッサージを行ったり、豊かな庭造り事業では自家製の腐葉土を販売したりします。ボランティアたちの手作りケーキやクッキー、デイサービスの利用者さんの手作り品の販売も行われました。いつぶく荘の住民もバザーのコーナーを開き、集まった人たちはお店で買い物をしたり、子どもたちがゲームに興じたりし、秋の一日を楽しみます。会の最後にはみんなが書いたメッセージを風船にこめて飛ばすのも、恒例となっています。この風船は自然にかえるという環境に優しい素材でできているものです。子どもからお年寄りまで、みんなが見守る中1000の願いがこもった1000個の風船が大空に放たれる姿に、地域が一体となった熱い思いの結集を感じました。



コミュニティケアを実現させるため

ケアタウン小平のケアチームの特徴とその工夫をまとめると次のようになります。

1. 運営主体の違う事業体が一ヶ所に集約したチームであること

1) 訪問診療、訪問看護、訪問介護など在宅療養を支える体制が基本的に 24時間機能するチームであること

2) そのチームはホスピスケアの理念を共有できていること。

3) チームは速やかに情報を共有し、患者・家族のニーズに的確に応えるため、チーム間の物理的距離は短ければ短いほどよいこと、つまり 物理的に隣接しているチームであること

4) 家族介護が中心の在宅療養は訪問だけを受けていたのでは、行き詰ってしまう。一定時間、家族を介護から解放し、また患者自身も家の中だけでなく、他者と交流できる場をもつことは、在宅療養を続けていく基本条件である。つまり介護保険上での ところのデイサービス（通所介護）は必須である

5) どんなに在宅療養を支える体制を整えても、不測の事態にそなえて入院や入所の可能な バックアップ病院やバックアップ療養施設と連繫していること

6) 在宅療養は介護保険と医療保険を効率的に活用しながら行われるため、がん末期も含めさまざまな病気の経過にも精通したケアマネージャーの存在が必要なこと

最期までその人らしく暮らし、生きていくことを支えるターミナルケアには知識と経験が必要です。そのためにチームで取り組むことは、大変重要です。

2. 独立した事業者の連携と自立した事業運営を目指していること

確かな理念のもとで、複数の事業者がそれぞれの分野で研鑽し事業継続可能な体制をつくり連携することで、単独で行うよりもよりコミュニティケア実現の可能性が高まります。また事業経営、事業運営上のリスクを分散しています。

NPO法人は、介護保険、医療保険の制度にもとづく介護報酬、診療報酬を主な収入として運営していますが、地域からのボランティアや寄付金の受け皿となり、よりよいサービスを地域の方へフィードバックすることによって、さらに協力を得ることができるといって、良い循環が生まれています。一方だけからの提供ではなく、互いに応援しあう関係によって、補助金、助成金に頼ることなく取り組みが保たれています。

また、現状で未整備なサービスの開発や新規事業への取り組みをそれぞれの事業者が自立して行えること。これまでの事業者以外との連携も工夫できることなども、コミュニティの展開に力となります。

3. 地域の力の受け皿となるNPO法人が中核事業体となっていること

1) NPO法人理事は無償

2) 現場の得た収入は現場に返すことを通して、顧客へのサービス向上につなげる。

3) ボランティアとの協働が要

4) 寄付はケアや事業の充実、現場環境の向上に使う

こうした余剰利益を分配せず本来の事業に振り向ける NPO 法人のあり方は、より地域の人々からの理解を得やすくします。

上記の 1 から 3 を支持する経営としてのファシリティマネジメントを担うにふさわしい健全な基盤が欠かせません。ここでは、暁記念交流基金の基金が基盤を担っていると考えます。

4. 活動の成果と今後の展望

医療と福祉のより良き融合を目指し、24 時間の「在宅ケア」と「末期ガンに限らないホスピスケア」をキーワードに取り組み始めた「ケアタウン小平」チームは、5 年目を迎えました。行政や地元医師会とも協力しながら、地域に根ざしながら、広く周辺地域の在宅ケアを支えています。チームが隣り合って存在することで、患者さんに関する情報を、直接、随時、共有できています。そのため医療や看護や介護の連携がスムーズになり、利用者を中心にしたケアの継続性が保ちやすくなっています。

当法人の運営する訪問看護ステーションでは、クリニックをはじめとしたケアタウン小平内の連携あるいは地域に点在する医療機関・事業者との連携によって、毎月平均 5 名の方の看取りのお手伝いしています。多いときは 8 名、9 名になることもあります。こうした事業所がなければ、「在宅で最期まで」と願う、地域の年間 60 名から 70 名の方の多くが、自分が望まない場所で人生の最期を迎えるわけですから、私たちの地域の中での役割の大きさを感じています。

デイサービスセンターでは、他所では受け入れることのできない重症度の高い利用者や頻回な痰の吸引や胃ろう処置、褥創処置など医療的ケアを要する方たちが多く利用しています。地域からの反応は大変大きなものでした。そしてケアが日中のみのデイサービスだけで支えきれぬケースばかりではなく、医者や看護師が訪問する中で疲労困憊の家族を目にすることもありました。なぜなら家族には日中よりも長い夜があるからです。介護保険サービスにおいて、こうした利用者、ご家族が在宅介護を継続するための選択肢は多くありません。短期入所（ショートステイ）などのサービスも重症な方の受け入れは困難な場合が多いからです。そのことに対し、厚生労働省の助成を受けてデイサービスによる夜間の宿泊サービス（ナイトサービス）の研究を全国 3 施設（東京・宮城・福岡）で共同研究し、その必要性を報告書としてまとめました。

社会的に目に見えにくいことを現場の実践を通して明らかにし、社会に提示していくことが、私たちの取り組みのもう一つの役割であるともいえます。

2007 年 12 月には、スタッフ主催のご遺族との交流会も行いました。約 50 名の方が参加されました。自己紹介のあと、フリートークでそれぞれの思いを語っていただきましたが、

「同じ体験をした遺族同士で話ができることがよかった」「心の整理ができました」などのご意見をいただきました。また、「遺族同士がお互いに励ましあうようなことができたなら」「何かの力になりたい」、あるいは「よりよい地域ケアが形成されるような議論をする時間を設けられたら」など、コミュニティケアに大きな力になってくださるようなご意見もできました。翌 2008 年には有志が集まり、遺族会「ケアの木」が発足しました。ケアタウン小平のサービスを受けて亡くなられた方のご遺族に対し、交流の場を提供することを設立目的とし、2009 年 4 月から活動がすこしずつ開始しています。遺族の中にも、ボランティア登録をして毎週活動する方も増えてきており、今後の遺族ケア、NPO 法人の活動などに大きな力になってくれることが考えられます。

生老病死は人の常です。人生のどの時期にも不安や苦悩はあるでしょう。私たちは自分の力だけでは自分の尊厳や自立を守ることが難しくなった方々の力になり、たとえ病気で寝たきりや認知症になり、自分のことが自分でできなくなってしまったとしても、自分の望む場所で、自立（自律）を保ち、尊厳を感じながら生き、死ぬことのできる地域社会を育てていきたいと願っています。